

星



森 下 博 三

星・星・星……満天に、あたかも宝石を鑲めたかのような星の輝きは、これを見る人にはそのおかれた環境の差異によつて、必然的に見方も違えば感じ方も変わつて来る。ただ無条件に美しいと感じたり、あるときには淋しいと思つたり、あるいはわけもなく何かを問ひかけてみたい衝動に駆られたり、日中のほてりの残つた夏の夜には涼しさの泉となり、凍つた冬の星空は、そのままお腹の隅々まで入り込んでしまふのではないかと思える。

いずれにせよこの星空を見上げる時間、自己の心は星々の世界に融合されることだけはたしかなようで、一番簡単に味わたる無我の境地ともいえるものではないだろうか。

古来、天体についての年中行事としては、まず、子どもを主体とした七夕祭りが上げられる。これにまつわる呼び方も、星合・星迎・星の夜・星供・星の契・星の舟などとその数も多い。月、地球、太陽もすべて星であることには変わりはないけれども、あまりにも身近なためにこうした考え方は

忘れられがちである。

月については陰曆八月十五日の仲秋の名月を賞める観月の宴が代表される。十六夜・立待月・居待月・寝待月・更待月そしてこれを過ぎれば宵闇と、日一日を加えることにその月の呼び方が移り変わつてゆくのも意味深く、待ち望んだ名月が雨で見えなければ雨月と言いかえる。その一つ一つのありさまが脳裏に面白く描けそうである。

また、太陽については初日の出を拝することから、高山において望む御来光(御来迎)といったところが主なものである。

これらの他にその星々の情景についてみると、天の川・星影・星の国・星の宿・星月夜・星の林・初日影・日輪など、それに春先の朧月にいたっては、色々な花や気象との関連もあつてその柔らかさがまた格別で、こうした文学的ないろいろな言い表わし方がなされるのも興味のあるところである。

しかし、いま実際に肉眼で見える星の数となると、空気の汚れた地方ではせいぜい四等星までで、その数は約数百個

位、都会を離れて大気の清澄な田舎や海岸、それに高山へでも行かない限り肉眼で見ることのできる六等星まで見ることは、至難なことである。それでも約二千数百個位のもので、それ以上となると望遠鏡によることとなるわけで、口径八センチメートルの簡単なもので百万個、パロマ山の世界最大の口径五メートルでは、約二十三等級位までの非常に暗い星の写真観測が行なわれている。これは光が地球に届くのに五十年以上もかかる遠い距離で、一等星の数億分の一の明るさしかないこととなる。

星の明るさは、大体一等星が一キロメートル離れたところにある一燭光の明るさに相当し、等級ごとの差は約二・五倍位であるから、肉眼でやっと見える六等星は、一等星の百分の一位の明るさしかないことになる。いま、太陽の明るさをこの方法で計算すると、マイナス二十六・七等星ということになり、一等星の一千億倍の明るさということになり、満月は大体マイナス十三等星、金星はマイナス四等星ということになる。しかし星の本当の明るさを比較するためには、地球から三十二・六光年（ナバーセク）のところに勢揃いさせて見る必要があるわけで、これによって得られる値を絶対等級という。先程の太陽を例にとれば、実際には地球から一億

四千九百六十万キロメートル（一天文単位）しか離れていない、見かけの明るさはマイナス二十六・七等であるのに絶対等級では四・七等星となってしまう。地球から八・七光年の位置にあるシリウスはマイナス一・四等星から一・三等星に、アークツルスが〇・二等からマイナス〇・三等星に、オリオン座のリゲルは〇・三等からマイナス六・五等星に、見かけ二等星の北極星はマイナス四等星という結果になる。

☆

最近東京では、雨後の空気の澄んだときでもない限り、銀河は勿論のこと星座すら判別しにくいことは非常に情ないことである。

「ホラ、一番星が！」「どこ、どこに」

「アッ、本当だ」やっ、一番星見付けたよ！

空の彼方を、小さな目を一ぱいに見開いて星々を捜し求める子等には、星を通して親を見つめ、親は星を仲介なごもとして子等を見つめる。ほのぼのとした心のかよい。だれしもが一度は味わい経験することではあるが、このようなほんの小さな呼びかけが、子等には敏感にひびきはねかえって来るということ忘れてはならないと感ずる次第である。

（東京大学・東京天文台）